

本科 1 期 5 月度

解答

Z会東大進学教室

早慶大世界史



4章 中世IV

問題

【1】

解答

- (1) b (2) b (3) a (4) d

解説

ノルマン征服からジョン王までのイングランドを取り上げた問題。やや難しい問題もあるが、どれも消去法で解けるので全問正解をめざしたい。

- (1) b カナリア諸島はモロッコ西部沖にあるスペイン領の群島である。ノルマン人が到達したという形跡はない。
- a ノルマン人はアイスランドには9世紀に到達したとされる。
 - c ノルマン人の流れを汲むルッジェーロ1世が11世紀末にシチリア征服を行なった（この後、ルッジェーロ2世が1130年に両シチリア王国を建国した）。
 - d ノヴゴロド国はノルマン人のルーシ（ルス）族を率いたリューリクによって862年に建てられた。
- (2) 下線部②の「11世紀初頭」「デン王」「イングランドを含む大王国」から1016年にイングランドを征服したカヌート（クヌート）を思い出してほしい。
- (3) a クラレンドン法は1164年、イングランド王ヘンリ2世が制定し、教会裁判権を王権によって規定しようとしたが失敗した。また、17世紀中期に制定されたピューリタン弾圧のための法律で、非国教徒の宗教的集会の禁止などを定めた法も同じくクラレンドン法（クラレンドン法典）という。
- b ドゥームズデー・ブックは1086年にウィリアム1世が徴税目的で作成した検地帳である。
 - c ヘースティングズの戦いは1066年、ノルマンディー公ウィリアムがイングランド王ハロルド2世を破り、ノルマン人によるイングランド征服の帰趨を決した戦闘。
 - d ロンドン塔はテムズ川北岸にウィリアム1世によって建設が開始された城砦で、12世紀には王宮となった。中世末からの刑場としても有名。
- (4) d 教皇インノケンティウス3世は第4回十字軍を提唱した。
- a 第3回十字軍実施のきっかけはアイユーブ朝を開いたサラディンがイェルサレムを占領したこと。
 - b・c 第3回十字軍にはイギリス王リチャード1世、フランス王フィリップ2世、神聖ローマ皇帝フリードリヒ1世が参加している。フリードリヒ1世は遠征途上で死亡、フィリップ2世も途中で帰国し、リチャード1世がサラディンと戦った。

【2】

解答

- 問1 シャンパーニュ地方 問2 ルイ9世
問3 a 仏：ヴァロワ朝 英：プランタジネット朝 b シャルル7世
c (イ) バラ戦争 (ロ) ランカスター家・ヨーク家 (ハ) テューダー朝
問4 (イ) 仏：ジャックリーの乱 英：ワット＝タイラーの乱 (ロ) ジョン＝ボール
問5 ヨーマン 問6 (イ) フィリップ4世 (ロ) ボニファティウス8世
問7 アヴィニョン 問8 カスティリヤ・アラゴン 問9 スイス

解説

中世ヨーロッパにおける封建社会の崩壊をテーマとした出題。今回の問題文は、14世紀初頭の“リトルアイスエイジ”と呼ばれる気候の寒冷化による農業生産力の低下とそれに続く農奴の地位向上、これに伴う封建諸侯の衰退と王権の強大化について上手にまとめたものなので、しっかりと読んでよく理解しよう。問われていることは基本的なものばかりである。

- 問1 「パリから南東の方向に位置する地域」といった地理的条件や、「トロワ」「プロヴァン」といった都市名からシャンパーニュ地方が正解となる。
- 問2 「第8回十字軍」「チュニスにおいて黒死病により病没」といったヒントからルイ9世が正解となる。この第8回十字軍とは、一般的には第7回十字軍(1270)をさす。ルイ9世は第6回・第7回十字軍と2回も十字軍遠征を行い、その両方に失敗し、とくに第7回十字軍では黒死病にかかって病没している。
- 問3 a ここでは百年戦争が始まった時の両国の王朝名が問われているが、他のパターンとしては、百年戦争が始まった時と終わった時の両国国王名の出題も考えられる。また、他に百年戦争の領土的・経済的原因もよく問われるので注意が必要である。
- b ジャンヌ＝ダルクとシャルル7世はペアで覚えておこう。この後、ジャンヌは魔女として処刑された。
- c 百年戦争は英仏両国に、騎士階級の没落と国王権の伸張という結果をもたらした。フランスでは前述のシャルル7世が中央集権化政策を進めるが、イギリスではバラ戦争を経てテューダー朝を開いたヘンリ7世によって王権が強化される。
- 問4 イ・ロともに頻出問題。
- 問5 ヨーマンとともにジェントリもチェックしておこう。双方とも頻出である。
- 問6・問7 カペー朝のフィリップ4世は王権の強化に努めた人物であるが、その一環として、ローマ教皇ボニファティウス8世と聖職者への課税をめぐる争い、クレメンス5世をローマからアヴィニョンに移した。
- 問8 カスティリヤ王女イサベルとアラゴン王子フェルナンドの婚姻により、1479年にスペイン王国が誕生する。レコンキスタが完成するのはその後の1492年の出来事である。
- 問9 「中央ヨーロッパ」「14世紀初頭」「ヴィルヘルム＝テル」というキーワードからスイスの独立が正解となる。国際的に承認されるのは、三十年戦争(1618～48)の講和条約、ウェストファリア条約においてであることも、しっかりと記憶しておこう。

【3】

解答

- (1) ④ (2) ③ (3) ④ (4) ③ (5) ② (6) ① (7) ① (8) ⑤
(9) ② (10) ①

解説

ノルマン人の侵入から百年戦争にかけてのイギリスとフランスに関する問題である。リード文は両国の関係について端的にまとめられているので、復習の際に改めて読み直しておくといだろう。

- (1) ①・② ノルマン人はスカンディナヴィア半島やユトランド半島に住む北方ゲルマン系民族であり、優れた造船・航海技術を有して各地で略奪を行い、ヴァイキングの名で恐れられた。ヴァンダル人はゲルマン人の一部族であり、5世紀にアフリカ北岸に建国して一時地中海を制圧したが、6世紀初頭にビザンツ帝国のユスティニアヌスによって滅ぼされた。
- ③ 『ガリア戦記』はローマのカエサル著作で、古ケルト・古ゲルマン研究の重要な史料であるが、ガリアは現在のフランスであり、ノルマン人の居住地とは一致しない。
- ⑤ ハンガリー王国は、東フランクのオットー1世に敗れたマジャール人によって、10世紀末にパンノニアに建てられ、11世紀にはカトリックを受容した。
- (2) ユトランド半島のデンマーク地方からイングランドに侵入したノルマン人は、イギリスではデーン人と呼ばれた。デーン人のクヌートは1016年にイングランドを征服し、デーン朝を開いた。
- (3) クヌートの死後、イングランドでは一時アングロ＝サクソン系の王が復位したが、1066年のヘースティングズの戦いでノルマンディー公ウィリアムがイングランドを征服し、ウィリアム1世としてノルマン朝を開いた（ノルマン征服）。なお、800年はカールの戴冠、962年はオットー1世の戴冠（神聖ローマ帝国の成立）、1054年は教会の東西分裂、1130年は両シチリア王国の建国といった中世ヨーロッパ史における重要な出来事が起こった年なので、いずれも覚えておくこと。
- (4) ①・② ヨーロッパの封建制においては、主君と家臣は双務的契約関係にあり、家臣は複数の主君に仕えることも可能であった。
- ④ ノルマン征服以降のイングランドにおいては、王権の強い独自の封建制が築かれ、諸侯の勢力は抑えられた。
- ⑤ ヨーロッパの封建制は、ゲルマン社会の従士制と、ローマ帝政末期の恩貸地制が結合して成立したものとされる。従士制は有力者から衣服や武器を与えられて保護を受ける代わりに、有力者に対して忠誠を尽くすという制度で、恩貸地制は主君が家臣に勤務の代償として土地を与える制度であった。
- (5) ノルマン朝の断絶後、フランスのアンジュー伯がヘンリ2世としてプランタジネット朝を開いた。
- (6) フランス王ルイ9世は、南フランスへアルビジョワ十字軍を派遣し、キリスト教の異端であるこの一派を根絶して王権を拡大した。選択肢に「アルビジョワ」の語はないが、アルビジョワ派はマニ教の影響を受けたカタリ派の一派であるので、①を選ぶ。

- (7) ② 1303年、教皇ボニファティウス8世はローマ近郊のアナーニで一時捕囚され、憤死した。1309年には教皇庁がフランス南東部のアヴィニョンに移され、以後、教皇はフランス王の監視下に置かれた。
- ③ 三部会は聖職者・貴族・市民代表の三身分から構成される。市民代表は商人のみとは限らない。
- ④ ②でも述べたように、アナーニはローマ近郊、アヴィニョンはフランス南東部に位置するので、「アヴィニョン近郊のアナーニ」は適切な表現ではない。
- ⑤ モンゴルにルブルックを派遣し、第6回・第7回十字軍を起こしたのはルイ9世である。
- (8) 百年戦争では、ボルドーを中心都市とするワイン生産地帯であるギューエンヌ地方や、毛織物生産が盛んなフランドル地方が両国の争奪の対象となった。
- (9) ① ジャンヌ＝ダルクはドンレミ出身で、神託を受けたとしてオルレアンに入り、自ら軍を率いてイギリス軍の包囲を突破した。
- ③ 百年戦争後、ジャンヌ＝ダルクはフランス国王と敵対するブルゴーニュ派に捕われてイギリス軍に引き渡され、異端者として火刑に処せられた。
- ④ ジャンヌ＝ダルクによって鼓舞されたフランス軍によってイギリスは敗退したが、フランス北海岸の港市カレーを唯一の大陸側の領土として保持した。
- ⑤ ジャンヌ＝ダルクの出現で敗勢を挽回したのは、のちの国王シャルル7世であった。
- (10) ②・④・⑤ バラ戦争では、有力貴族がランカスター家とヨーク家に分かれて互いに争った結果、疲弊して勢力を後退させていった。一方、戦争終結後に開かれたテューダー朝の下で、国王は星室庁裁判所を設置するなどして貴族の反抗を抑え、絶対王政を確立した。
- ③ テューダー朝を開き、両派を和解させたのはランカスター系のヘンリ7世である。

5章 中世V

問題

【1】

解答

問1 1 s 2 j 3 e 4 u 5 y 6 n 7 x 8 m
9 w 10 a 11 z 12 l 13 g 14 q 15 k

問2 ユスティニアヌス帝 問3 ケルト人 問4 セルジューク朝

問5 イサベル (イザベラ)

解説

イベリア半島のイスラーム化からレコンキスタの終了までを扱った問題。記述式問題が基本的である一方、記号選択式問題にはやや難しいものが混ざっている。以下の解説を読み、問題を解くに当たってのヒントをつかめるとよいだろう。

- 問1 1 トレドはスペイン中部に位置し、8～11世紀にイスラーム文化の中心都市として繁栄した。レコンキスタで1085年にキリスト教の勢力下に奪回された。この都市でアラビア語文献のラテン語訳が多数実施されたことが、中世末期の西ヨーロッパの学問発展に多大な貢献をすることになる。
- 2 植民市カルタゴを築いたのはティルスフェニキア人。
- 3 コルドバは西方イスラーム世界の中心都市であった。1236年にレコンキスタでキリスト教勢力が奪回した。
- 4・5 アブド＝アッラフマーン3世は後ウマイヤ朝最盛期の君主で、929年にカリフを称し、10世紀初頭の建国当初からカリフを称したファーティマ朝君主や、バグダードのアッバース朝カリフと対立した。
- 6～8 モロッコのベルベル人は11世紀から急速にイスラーム信仰を強め、マラケシュを都にムラービト朝を建てた。問題文にもあるように、ムラービト朝とそれに続いてモロッコに成立したムワッヒド朝は、ともにイベリア半島南部にまで一時は勢力を拡張した。
- 9～15 選択肢がなければ解答困難なものが多い。イブン＝ルシュド（ラテン名はアヴェロエス）はムワッヒド朝時代のアンダルス（イスラーム支配下のイベリア半島）で活躍し、アリストテレス研究で有名である。また、ムワッヒド朝君主の侍医も務め、『医学大全（医学概論）』を著した。イドリーシーはモロッコで生まれ、両シチリア王国のルッジェーロ2世に招かれ、パレルモの宮廷で世界地図とその解説書である『ルッジェーロの書』を著した。『三大陸周遊記』のイブン＝バットゥータがモロッコ出身であることは有名。彼は西アフリカのマリ王国・インドのトゥグルク朝・中国の元朝などを訪れた。イブン＝ハルドゥーンは『世界史序説』で乾燥地帯と都市社会の歴史の循環法則を示したことで有名（『世界史序説』は3部から成る『実例の書（イバルの書）』の第1部をさす）。14は問題文中の「アルハンブラ宮殿」からナスル朝の都グラナダと容易に判断できよう。13も都市名と考えられ、

選択肢からセビリャ・バルセロナ・マドリードに絞れる。後は地理の知識が豊富か否か。問われている半島南西部アンダルシア地方にある都市はセビリャであり、バルセロナは北東部カタルニャ地方、マドリードは中部カスティリャ地方の都市。

問2 東ローマ帝国皇帝ユスティニアヌス（位 527～65）は、西方でゲルマン人国家のヴァンダル王国と東ゴート王国を滅ぼし、東方ではササン朝のホスロー1世（位 531～79）と対立した。

問3 ヨーロッパ基層文化の1つを築いたケルト人の原住地はライン川・エルベ川・ドナウ川間の地域で、前10～前8世紀に移動を始めて広く西欧・中欧に居住していたが、ゲルマン人やローマ人に征服された。ケルト文化は今日ではイギリスのウェールズ地方やフランスのブルターニュ地方、アイルランドなどに残存する。

問4 問題文の「11世紀」が大きなヒントとなる。セルジューク朝はトゥグリル＝ベクを初代とするスナ派イスラーム王朝（1038～1194）。一時は中央アジアから小アジアまでイスラーム世界の東半分を支配した。

問5 イサベルはコロンブスの航海を支援したことでも有名な女王。夫となったアラゴン王フェルナンド2世は、スペイン王としてはフェルナンド5世である。こちらも正確に覚えておきたい。

【2】

解答

- A イ グラナダ ロ アッパース ハ セルジューク ニ ビザンツ
ホ 世界の記述 ヘ リューベック
- B 1 i 不輸不入権 ii d 2 d
3 i ツール・ポワティエ間の戦い ii a 4 国土回復運動（レコンキスタ）
5 b 6 a 7 i b ii b 8 b 9 d

解説

中世ヨーロッパ世界の拡大を、貿易や十字軍など、複数の角度から取り上げた問題。イスラームに関連する設問もあるので、復習も兼ねてしっかりと整理しておこう。

- A イ イベリア半島最後のイスラーム王朝であるナスル朝の都。
ロ 750年にアブー＝アルアッパースがマワーリーとシーア派の不满を背景にウマイヤ朝を倒し建国した。
- ハ・ニ セルジューク朝のアルプ＝アルスラーン率いる軍が1071年に小アジアでのマンジケルトの戦いでビザンツ帝国軍に勝利した。
- ホ 元朝から戻ったマルコ＝ポーロが、ヴェネツィアと戦っていたジェノヴァに捕えられ、1298年に獄中で語ったものを、ルスティアノー（ルスティケロ）が記述したとされるのが『世界の記述』。
- ヘ 問題文で示されている北ドイツ諸都市の同盟がハンザ同盟とわかれば、その盟主であるリューベックはたやすく思い出せよう。
- B 1 i ラテン語ではインムニタスと呼ぶ。

- ii 6世紀頃から聖職者の扶養・教会維持や救貧などを目的に、収穫物の10分の1を徴収するようになった。
- 2 ノルマン人とは「北方の人」の意味で、北ゲルマン諸族をさす。
- 3 メロヴィング朝フランク王国の宮宰カール＝マルテルが、西ゴート王国を滅ぼしてイベリア半島から侵攻してきたウマイヤ朝軍を撃退した。
- 4 国土回復運動（スペイン語ではレコンキスタ）は8世紀にウマイヤ朝によりイベリア半島が占領された直後から開始され、1492年のグラナダ陥落で完成する。11世紀後半からレコンキスタが本格化し、最終的にキリスト教国のポルトガル・カスティリヤ・アラゴン3国の力を中心に推進される。1085年にトレド、1236年にはコルドバがキリスト教勢力圏となる。レコンキスタの過程で、1479年にカスティリヤ・アラゴンが同君連合を形成してスペイン王国が成立する。
- 5 アラビア語ではディマシュクと呼ぶ。
- 6 当初、アミールはアラブ人が任命されたが、アッバース朝時代からはトルコ人・イラン人のアミールも任命されるようになり、その中からトゥールーン朝やサーマーン朝のように、アッバース朝から自立するものも現れた。
- 7 ビザンツ皇帝アレクシオス1世が西欧世界に救援を求めたことを受けて、クレルモン公会議で教皇ウルバヌス2世が援軍（十字軍）を提唱した。
- 8 帝国都市とはドイツの自治都市で、神聖ローマ皇帝に直属する形をとり、諸侯と同等の地位を有した。
- 9 プラノ＝カルピニは教皇インノケンティウス4世が派遣し、カラコルムを訪れた。モンテ＝コルヴィノは教皇ニクラウス4世が派遣して、大都で初めてカトリックを布教した。彼は大都の初代大司教となった。ルブルック・プラノ＝カルピニ・モンテ＝コルヴィノはフランチェスコ会士。aのアダム＝シャルは明末清初の中国で活躍したイエズス会士。

【3】

解答

設問1 1 設問2 4 設問3 2 設問4 3 設問5 4 設問6 4
 設問7 2

解説

先史から15世紀末までのイベリア半島についての問題。早稲田大学の正誤問題としては基本的なレベルの問題が大半を占めているので、確実に正解したい。古代など、以前に学習した時代に関する問題で誤ってしまった場合は、しっかりと復習をして、改めて記憶を定着させておこう。

設問1 ネアンデルタール人は原人と現生人類（新人）との間に位置する旧人である。ネアンデルタール人の化石の出土状況から、埋葬の風習を持っていたと解釈されている。

設問2 cは第1回ポエニ戦争、a・dは第2回ポエニ戦争、bは第3回ポエニ戦争に関する出来事である。この問題の場合、最初の出来事がcで最後の出来事がbであることがわかれば正答を選べる。参考までに、第2回ポエニ戦争は前218年にハンニバルがアルプスを越え

て北イタリアに侵入し、前 216 年のカンネーの戦いでローマ軍は大きな打撃を受けたが、前 202 年のザマの戦いでローマ軍がカルタゴを撃破した、という前後関係についても押さえておこう。

設問 3 カタラウヌムの戦いでは、西ローマ・西ゴート・フランクの連合軍が、アッティラ率いるフン軍を破った。アッティラはこの戦いの後まもなく死亡し、フンの帝国も崩壊した。

設問 4 アルハンブラ宮殿は、ナスル朝の時代にグラナダに建てられた宮殿。西方イスラーム世界の代表的な建築とされ、華麗なアラベスク模様で装飾されている。

設問 5 フェリペ 5 世がスペイン＝ブルボン朝の始祖となったのは 1700 年である。スペイン＝ハプスブルク家が断絶し、ルイ 14 世が孫フェリペにスペイン国王位を継承させようとしたことからスペイン継承戦争（1701～13）が起こった。戦争後、フェリペ 5 世の王位継承は認められたが、フランスとスペインの合邦は禁止された。

設問 6 トラヤヌス帝の時代、現在のルーマニアに当たるダキアが属州となるなど、帝国の版図は最大となった。

設問 7 ポルトガル王国は 1143 年にカスティリヤ王国から分離・独立し、国土回復運動の中心となり、さらにアフリカ西岸航路の開拓も積極的に行った。